

1面のつぎ

人の話を聞くことによつて知つた、部落差別は今も残っているよ、ということも、15分間ぐらいしゃべりました。足はガクガク、頭は真っ白。苦しくも悲しくも無いのに僕の目からは汗がプワつと流れました。人間は自分の弱さを語る時に、必ず目から汗がこぼれます。でも僕は一生懸命しゃべり続けました。「部落差別は今でも残つてるけど、ここにおるみんなだけでも、一生懸命考えていいたら、ちよつとずつでも無くなつていくと思う」と。言い終わると、僕は体育館の一番後ろの壁にもたれて、ヒザをかかえて座りこみました。体育館はシーンとしたまま。「うわあ、僕変なこと言うてしまったかな。言わんぼうがよかつたかな」と考えました。そしたらしばらくして、同じクラスで仲の良かった子が「はいっ！マイクを貸してください」と言つて手を挙げました。その子はこう言いました。「んー僕、あのお：ピーマンが嫌いです。野菜が全般的に嫌いなんやけど、これからは食べてみようと思ひます」これだけ言うて座つたんですよ。ええ?! 関係無いやんつて思つたんですね。でもその子は自分が嫌いな食わず嫌いのピーマンと同和学習を重ね合わせて言うてくれたと思うんです。今まで同和学習つてピーマンみたいに食わず嫌いだつたけど、これからは、ちよつとずつでも勉強していつてみようと思つと、そんな意味で言うてくれたと思うんです。シーンとしていた体育館が、笑いの渦に包まれました。その後いろんな子が発表してくれて、人権集会は大盛況の内に終わりました。僕は集会が終わつても、体育館の後ろの壁にもたれていました。たつた15分しゃべつただけで、僕は立てないくらい疲れていました。そしたら僕の周りに全校生徒が集まつてきてくれました。そして一言ずつ「中倉感動したわ」「そんなん(被差別地区出身であること)全然関係ない。これからはもうと友だちや」「もつと早く言うてくれたらよかつたのに」「真冬だつたけど熱い熱い中、人権集会は終りました。ああこれが、僕の仲間が言つてた人権学習かな、と思ひました。それからは、人のぬくもりを伝えていけるような、そんな人間になりたいなあと思つようになりました。

結婚差別に向き合つて

ここからは、僕が2年前に結婚した時の、結婚差別との闘いの話を皆さんに聞いてもらいたいと思ひます。

僕は2006年7月12日に結婚しました。その1年前の2005年7月12日から同じ徳島県出身の武市宏美という女性と、お付き合いを始めた。僕はつと宏美ちゃんに「宏美ちゃんを育ててくれたお義父さんとお義母さんに、いつでも挨拶に行くからね」と言つていました。彼女は3人兄妹で両親とおばあちゃんの家族で暮らしていました。10月に医大の寮から帰省した宏美ちゃんはずつとくお母さんに聞かれました「あんたも年頃やし、お付き合いしてる人とか、結婚したい人とかおらんのか？」宏美ちゃんは「実は結婚したいと思つて居る人がおる」と答えました。するとお母さんは「どこの人？同和の人と違うんか？」と返して来ました。

宏美ちゃんは先入観を持たずに、僕の中身を見て欲しいと思つたので「被差別地区の人だよ」とは言えませんでした。代わりに「もし、被差別地区の人だつたらどうするの」と聞いたら「家を出て行きなさい」と言われました。翌週改めて今度は他の家族や親戚もいっしょに僕のことについて話し合ひになり、宏美ちゃんは僕のことを「誠実な人で…」とかなり良いように説明してくれました。

数日後、宏美ちゃんに、ものすごい剣幕でお母さんから電話がかかつて来ました。「もう2度とその人と会つたらいかんよ。」とのことでした。どうやら親戚の人が、僕の出身地に知り合ひがいたらしく、いわゆる「聞き合わせ」身元調査」をしたようです。そして「ああ絶対やめといたほうがいい」と根拠のない話を伝えたそうです。身元調査が何故いけないかというところ、事情を知ら



ない第三者の偏見等によつて、事実が情報操作されて広まってしまうからなんです。娘の彼氏なんだから、直接会つて話を聞いたらいいじゃないですか。宏美ちゃんは一生懸命言い返してくれました。「私が良い人だと言つてるんやから、一度会つて」と。するとお母さんは「被差別地区の人には会う必要ない。嫌いだから」そればかり。お父さんもほぼ同じ。話し合ひは朝まで終わりません。宏美ちゃんは一番しんどい立場ですよ、このしんどい宏美ちゃんを助けてくれたのが、僕の仲間たちです。「今、宏美ちゃんがすごくしんどいので、すまんけど集まつてくれへんか」と僕は1人にだけ連絡しました。そしたらその晩、200人くらい集まつてきました。仲間たちは宏美ちゃんに言ひます「大丈夫なことない。気にせんでええよ。あんなお父さんとお母さん今怒つとるんやろ。人間怒つとる時にもものすごいパワー使うんよ。いつしか電池が切れて、はつと、我に返る時があるわ。その時に聞いてもらえそうやつたら、話したらええんよ。怒つとる人間に話ししようなんて、そんな無駄なことはない。宏美ちゃんの言つて居ることは100%正しい」僕らの仲間はみんなそういつてくれるんです。そんな中で宏美ちゃんは何か持ちこたえました。

実は12月24日のクリスマススイブに僕は、宏美ちゃんに、こうプロポーズして居ました。「言ひだけ「幸せになるために結婚しよう」でも「もう少し考えさせてくれる？」つていう返事やつたんですね。3月23日、僕の誕生日の日です。宏美ちゃんも覚悟したんでしょう。熨斗をつけた桐の箱に入れた腕時計を僕のところにつけてきました。「私らは、結納とか結納返しはできないと思ひます。ただ親とか親戚まわりがどんなに反対しても、私は幸せになるために結婚しようと思ひました。」「結婚は、両性の合意のみに基いて成立」と憲法第24条にも書いてあります。じゃあ、ちよつど付き合つて一年の記念日に婚姻届を出しに行こうかということになりまして、7月12日に婚姻届を出しました。

幸せになるために

宏美ちゃんは程なくして、妊娠しました。僕は、幸せな気持ちのまま赤ちゃんを産んでほしいと思ひ

ました。生まれた息子にふる里の「里」に温かいと書いて「里温(りおん)」と名前をつけました。ふる里のぬくもりを一身に受けて、温かい人間になつてほしいという願ひが一つ。もう一つは大きくなつたときに、そのぬくもりを今度は周りの人に伝えていける、そんな人間になつてほしいなと思ひ名づけました。一ヶ月ぐらいたら、外出しても良くなります。宏美ちゃんに言ひました「里温がな、おじいちゃんとおばあちゃんに会いたいわつて言ひます。(生まれ一ヶ月なので実際にはしゃべれませんが)連れて帰るんやつたら、いつでも行きや。1人で帰るのが不安やつたら僕が付いていつてあげるからな。」

7月1日、実家に向かいました。庭先に車を停めて玄関まで行こうとしたら、おばあちゃんが出てきて「あれ、宏美、帰つてきたんや。元気にしとつた？まあ中に入りなさいな」と言われて玄関に入つてすぐ右の居間に案内されました。その奥の部屋でお義父さんがテレビで野球を観て居ました。出てきません。「何しに帰つてきたんや」と声が聞こえました。まあ予想通りやなと思ひました。その時お義姉さんが「お母さんが近所に行つとるんで、ちよつと呼んでくるわ」と呼びに行つてくれました。10分ぐらいてお義母さんが帰つてきて、僕は「はじめまして、中倉茂樹と言ひます。息子の里温が生まれてたんで、抱つてほしいと思つて連れてきました」と、さわやかに挨拶しました。お義母さんは僕の挨拶もそこそこに、「おーよしよし。かわいい顔してるなあ。男前の子じやない」と言ひ、寝てる里温を抱つてくれました。さすがに僕も「ええ？」と思ひました。その後、お母さんは昔の宏美ちゃんの話をお話してくれました。2時間ほどもたわいもない話をしている内に、宏美ちゃんが里温を抱つて、お義父さんのところに連れて行きました。「お父さん帰つて来たから」と言つと、お父さんは「お前元気にしとつたんか」「うん元気にしとつたよ」と言つてくれたそうです。一体あの(結婚反対!)の騒ぎはなんやつたんやと、いう話です。お義母さんが「今日、焼肉するから食べていきなさい」と言つてくれて、僕はむちゃくちゃ嬉しかつたんやけど、お義父さんと、まだ顔を合せていなかったたので、お義父さんのほうが気まずいかなと思ひ「今日のと



先月号につづき、藍中学校2年生
尾崎 礼佳さんの人権作文を紹介します。
人を大切にするため、自分には何ができ
るのか？尾崎さんの「思い」や「気づき」
は、あなたに何を伝えるでしょうか。

「私の肩を貸してあげたい」
三田市立藍中学校二年
尾崎 礼佳

私の祖父は今年で米寿を
迎えました。
今から二年前の大みそ
か、急に足が動かなくなっ
てしまいました。その後も
何度か入院をくり返しま
した。診察の結果、せきず
いこうそく、と言われまし
た。今までは毎週月曜日大

ころは帰らしてもらいます。また、今度来ます」と
答えました。「じゃあ今日は肉屋で、安売りしとるん
で、あんた付いてきなさい」と言っ、焼肉用の肉
500グラム、鶏肉1キロ、牛ミンチ500グラム、
スペアリブ、コロッケ。これだけを土産に持たせ
てくれました。お礼を言っ帰ろうとしたら、お義
母さんが寄ってきてくれて申し訳なきように僕に言
うんです。「今日はごめんよ。お父さんは失礼なこと
したな。ほんまに申し訳ないことしたな」「いや、お
義母さん、気にしないでいいし、もう怒ってないからね。
そんなことより、今日メロン出してくれたり、宏美
ちゃんの話の話を聞かせてくれたり、手土産まで持
たせてもって、楽しかったです。若い2人ですから、
いろんなことがあると思いますが、2人仲良く力を
合わせてやっていきますから、よろしくお願いま
す。それと僕、この(実家のある)地域が大好きな
んですよ」と言いました。僕は、たくさんの仲間と
大好きな宏美ちゃんを育ててくれたこの地域のこと
が本当に好きでしたから。そしたら今まで申し訳な

阪の家から三田の家まで、毎週金曜日三田の家か
ら大阪の家まで車で行き帰りしてました。それ
なのに、急に足が不自由になってしまっ、とても
かわいそうです。もう、こんな悪夢の様な事が起
こらないと思っ、いたのに、また昨年新たな病氣
が発症しました。
それは、認知症、という病名です。認知症とは、
今までの記憶などがどんどん失われていく病氣で
す。この病氣は治す薬は無く、進行を防ぐ薬しか
ありません。最初の何日かは毎日同じ事ばかりで
今住んでいる家が誰の家なのかはつきり分らず、
聞いている私たちが悲しくなり
「そうだね」
などの言葉しか返せない私がついて、とても悔しかっ
たです。それでも毎日、薬を飲んで少しでも良く
しようとがんばっています。
祖父は足が不自由で、どこへ行くにも車いすで、
ベッドから車いすへ移動するのも大変です。お父
さんやお母さんの肩につかまり、ベッドから車い
すへ移動します。お父さんやお母さんは、腰が痛
いとよく言っています。

さそうにしていたお義母さんの顔が、ふと笑顔になっ
てね。僕今まで差別から解放される瞬間の表情を何
百人も見てきました。人間が本来するはずの、優し
いあたたかい表情をして、僕ら3人を見送ってくれ
ました。それ以来毎週土日帰っています。お義父さ
んも、お義母さんも里温がかわいくて仕方ないよう
です。お義母さんは「これうちの孫や、かわいい顔
しとるやろ」って、あれだけ反対しとった近所や、
親戚の家に抱っこして連れて行っています。お義母さ
んにとっ、差別を無くす活動っていうのは、机の
上で勉強することじゃないんですよ。里温を抱っこ
して連れて行くことが、差別を無くす活動なんです
よ。やっぱりその営みの中で、人間は初めて人間ら
しい本来の姿に戻っ、いくんじやないかなと思いま
す。僕は今年の初め、1月3日にお義父さんに会い
ました。「お義父さんいつも里温のこと大事にしてく
れてありがとうございます。今年もよろしくお願いま
します」そうしたらお義父さんが「うちの娘はちよっ
と頼りないところもあるけどな、これからもよろしめ

最近祖父はよく
「早く死にたい」
と言う様になりました。また、私のマージングの大会
を見に来てほしいと言っ、でも、行けないと言いま
す。でも本当は祖父は、もっと長生きしたいと思っ
ていると思っ、私のマージングの大会も見に行
きたいと思っ、います。
しかし祖父は、自分が長生きする事によっ、周
りが、迷惑している、と思っ、います。また、マ
ージングの大会に行く事でお父さんやお母さんが大
変な思いをすると思っ、います。
世の中には、障がいのある人や車いすの人はたく
さんいます。その様な人たちが、みんな遠慮して生
きていると思っ、心が痛くなります。障がいのある
人も車いすの人も、すべての人は長生きする権利は
あるし、演技を観る権利もあると思っ、います。
障がいのある人や車いすの人が自由に楽しく生きる
事が出来る世の中にならないと思っ、います。
私は、大きな事は出来ませんが、障がいのある人
や車いすの人には笑顔で私の肩を貸してあげたいと
思っ、います。

う頼みます」と言っ、くれた。
親になっ、改めて、親の幸せっていうのは、子
どもが幸せになることじゃないのかなと思っ、います。
だから僕はいつも若い人に言っ、います。「幸せにな
る時に、親に氣を使う必要なんてないよ。目いっ
ぱい幸せになっ、たらいい。親が最後死んで逝く時
に一つだけ心配することがあるとしたら、自分の
子どもが幸せになっ、てるかどうかやと思っ、この
人と結婚したら幸せになれる。こういう信念があ
るんやったら、自分が幸せになっ、てるその姿を見
てもらいなさい。これが親の幸せや。その信念を
貫くことが、育ててくれたお父さん、お母さんに
対する最高の恩返しや」と。だから、宏美ちゃんや、
お義父さんやお義母さんは、今幸せそうな顔して
ますわ。実は、9月3日に「響希」という2人目
の子が生まれました。これからは家族4人で幸せ
になっ、ていきたいと思っ、ています。50才になっ、
ても60才になっ、ても：90才になっ、ても、差別を無
くす輝いた生き方をしていきたいと思っ、ています。

コーヒータイム

カフェ・フェアトレード



コーヒータイムということ、今回は
私とコーヒーとの関わりをお話します。
私は結婚以来、毎朝ネル(紙フィル
ターではなく布)で入れたコーヒーを
楽しんでます。そしてこれが、今参
加しているボランティアの活動の一部、
一日のコーヒーショップ「カフェ・フェア
トレード」への参加となっ、ています。
フェアトレード(注)とは市場貿易に對
抗し、生産者が正当な労働対価の得ら
れる価格で、消費者と直接行っ、取引の
ことです。調べると、腹立たしくなる
ような様々な現代の矛盾をはらんでい
ますが、根底には発展途上国の貧困が
あります。貧困といっ、ても、一見、物
に溢れた豊かな国に住む私たちには、
遙かかなたの他人事でしかありません。
年に一、二回しか開かれなないコー
ヒーショップで、何かが変わるとは思
いません。ただ生産者が、一つぶ一つ
ぶ手で収穫してくれたコーヒーを、少
しでもおいしく入れて飲んでもらいた
いのです。嬉しいことに、この活動に
協力してくれるボランティアの仲間に
支えられて、三年目を迎えています。
そして飲みに来て
くださった方々に、
「おいしかったよ」
と声をかけていただ
くこともあります。
それは「小さな個人
で、何ができるとい
うのかしら」という
思いが、吹っ、飛んで
しまう瞬間です。
この催しは人のた
めだけではなく、自分のための活動と
なっ、ています。私の入れたこの一杯の
コーヒーで、一人でも多くの人がコー
ヒー農家に思いを馳せてもらえれば、
と願っ、ています。

深井 佳世子 (三田市国際交流協会)

(注)中間マージンを省き、生産者の生活安定を図る